ヨアヒム・シャルロート（獨協大学）

ドイツ連邦共和国の文化史における 1968 年

ドイツ連邦共和国における 1968 年運動は、確かにその政治的目標こそ達成できなかったが、しかしながらその運動は、日常文化に著しく大きな影響を与えた。この講演で私が主張するのは、68 年運動から、とりわけコミューン（生活共同体）運動およびオルタナティヴな（従来とは異なる）社会環境から、ある新たなコミュニケーション・スタイルが発展し、それがドイツ連邦共和国の社会を今日に至るまで特徴づけているというテーゼである。このコミュニケーション・スタイルは、1968 年には、真の感情と連帯的な親近性の表現として意図されていたが、多数派社会においてそれは、新たな行動基準として定着していった。すなわち、インフォーマリティ（形式ばらないこと）やエモーショナリティ（情緒性）の演出として、言い換えれば「doing buddy（仲良くしようよ的な表現）」として。

この講演で私が歴史的射程に入れるのは、1960 年代の儀礼批判および反儀礼主義者の問題から、1970 年代のオルタナティヴな社会環境における快楽主義的なライフスタイルの形成を経て、1980 年代以降のコミュニケーションおよび交際形態の変化に至る過程である。資料としては、1960 年代、70 年代のテクスト、画像およびヴィデオ録画、あるいは礼儀作法に関する書籍が使用される。

****

ヨアヒム・シャルロート

マインツ大学、ハイデルベルク大学に学ぶ。2002 年ハイデルベルク大学にて博士号、2008 年チューリヒ大学にて教授資格審査取得。フライブルク大学、チューリヒ大学客員教授。2010 年より獨協大学准教授。テーマ関連の最新刊：„1968. Eine Kommunikationsgeschichte (1968 年：コミュニケーション史)“ (2011)、(Zusammen mit M. Klimke und J. Pedelder, Hg.) „Between Prague Spring and French May 1968. Opposition and Revolt in Europe, 1960-80 (1968 年，プラハの春とフランス 5 月の間：ヨーロッパにおける抵抗と反乱，1960～80 年)“ (2011)。